『近代日本の教育とキリスト教』
その1　序　説

平　沢　信　康*

Christianity in Modern Japanese Education
Introduction

Nobuyasu HIRASAWA*

Abstract

The Japanese first encountered Westerners at the end of the medieval period. Europeans introduced rifles, Western culture and religion to Japan in the 16th century. They also promoted Christianity and founded schools. However, soon the power of the Tokugawa Shogunate prohibited Christianity, and the same policy continued through the Edo era for about two and a half centuries.

Soon after the Meiji Restoration, in February 1873, the prohibition was abolished. Missionaries were sent from Western countries to Japan, eager to propagate Christianity.

Christianity became an important influence in various areas of Japanese life. One of them was in the field of education. Missionaries and Japanese believers founded many schools and worked as educators.

Some of them were active in the education of women. Some were engaged in educational welfare (reform of youth, relief work for orphans, education of handicapped children, etc). Others played an active part in higher education, and influenced intellectual young people.

This paper is an introduction to the influences of Christianity on education in modern Japan, and researches into roles and functions it played in Japanese educational history.

KEY WORDS：近代日本の教育　キリスト教　教育文化交流　西洋の衝撃

概　　要

日本人が直接に西洋との接触を経験したのは，1543年のポルトガル人の渡来にはじまる。日本人にとって，世界が全体として見えてきたのはその頃からである。

*鹿屋体育大学 National Institute of Fitness and Sports in Kanoya, Kagoshima, Japan.

周知のことだが，キリスト教という世界宗教[1]に，日本人は中世末期に初めて出会う。1549年，宣教師スペイン人イエズス会士フランシスコ・ザビエルの訪日である。カトリック信徒は急速に増加し，1580年までに200の教会とキリスト教徒15万人（人口の１％），1593年までに30万が受洗した。1612年には60万人という伝道成果を挙げた。しかし，1614年，キリスト教は禁止され，厳しい迫害を受けた。当時，キリスト教徒は総人口の3.5％あったが，そのうち４万人以上が殺され，教会は取り壊され，宣教師は国外へ追放排除された。以後16年間の迫害で，日本のカトリック教会は壊滅し，1900人が磔刑により殉教，他は隠れキリシタンとして地下に潜伏せざるを得なくなった[2]。

家康のとった鎖国政策は，主にキリスト教の影響を根絶しようとの意図に発していた。その後，わが国において近代的なナショナリズムが台頭した時期に，幕府はようやく鎖国を解き，ほぼ２世紀半の年月を経て，日本人は再びこの西洋の宗教に接触することになる。

ポルトガル人たちは，16世紀には，主として日本の西部にキリシタンの信仰と学問や文化をもって影響を与えていた。ポルトガルのパードレやイルマンたちの献身的努力によって，16世紀半ば以来，多くのキリシタンの学校が日本の土地に建てられるようになった。初等学校は豊後府内（大分）その他に，セミナリヨやコレジョは同じく豊後府内，有馬，さらに安土などにも建てられ，数学や天文学を教える学院も京都などに設けられ，日本の青年たちを，信仰とともにカトリシズムの学問や当時の西欧的科学へ導いていた[3]。

キリシタンたちは，中世ヨーロッパのイエズス会的学制にならって，そのような教育機関を建てて，日本人布教の戦士の養成にのり出していた。キリシタン諸学校の校舎の構造や教育内容やその他には，当然，日本の伝統的なそれと異なったものがあった。たとえば安土に建てられたセミナリヨは３階建てで，３階には30数個の部屋があり，学校は運動場や生徒休養所などをもっていた。ラテン語，ポルトガル語，数学，場合によっては音楽，絵画，銅版術などを教えた教育内容も，すべてヨーロッパのものであった。しかし，寄宿生の日課は，当時大寺院に付置されていた日本の学校の日課と一致するところが多かった。また日本人学生は日本食・日本服・日本流の礼儀作法で生活を訓練されていた。教育内容にも，日本語，日本の歴史を加える配慮ぶりであった[4]。

このように，16世紀後半から17世紀前半にかけて，キリスト教，とくにジェズウィット教会の活動によって，ヨーロッパの学校制度が移植され，初等学校，セミナリヨ，コレジョ，アカデミアなどの，いわゆるキリシタン学校と呼ばれているものが創られ，このうち初等学校は，1580年頃には200校近くあったとされている。ところが，せっかくのこうした学校も，近世になるとあとかたもなく消滅してしまい，後世の教育に何らの影響も残していない。幕府や諸藩の手による苛酷な弾圧が根本的な原因だったのはいうまでもないが，これに先だつ中世において，こうしたヨーロッパ式の「学校」を受けいれ，育て，普及させていくだけの地盤がまだつくられていなかったところにも大きな理由があった[5]。

これらの諸学校は，キリシタン禁圧の歴史のなかで姿を消し去り，彼らの活動は，学校制度そのものとしては，その後に影響らしいものを残したようにはみえない。しかし，医学や天文学（暦法），航海術などに南蛮学の系譜を残していった。南蛮学は，信仰を引き去った知的影響を日本の知識追求者たちにとどめることによって，やがて蘭学の成立までの時期に，日本人の知的活動を刺激する西欧的学問として忘却されることなく存在を保っていた[6]。

キリスト教「解禁」以前にも，江戸時代後期の知識人のなかにはキリスト教の摂取を試みたものがいる。国学者の平田篤胤は，キリスト教の本を中国語訳で読んでヒントを得，産霊（むすび）の神，『古事記』の最初に出てくる天之御中主神（あめのみなかぬしのかみ）を最高神としたほどである[7]。

留学史的にみると，中世末期には，かつての遣隋使・遣唐使に勝るとも劣らない決死行といえる西欧留学が行われた。約440年前に，大分から初

めてのヨーロッパ留学生が出発している。

計画の立案者はフランシスコ・ザビエル（彼の所属したイエズス会は近代になって東京四谷に上智大学を作り，多くの留学生を海外に出している）である。山口出身者と鹿児島出身者の二人（洗礼名はマテオとベルナルド）は，1551年11月，帰国するザビエルと共にポルトガル船に乗って大分港を出発し，2人の日本人のうち，山口県出身の青年はゴアの暑さに耐えきれず病没して，鹿児島出身のベルナルドだけ，アフリカの南端をまわり，2年近くかかってポルトガルのリスボン港に到着した。4年後，彼も彼の地で病没している。戦国時代，その後も何人もの日本人留学生が波濤万里，ヨーロッパに渡った。彼らのほとんどは島原半島有馬と，信長が築いた安土城のある安土に創られた2つの学校の在学生か出身者である。これらの学校でラテン語やポルトガル語を習い，留学したが，幕末や明治の留学生と違い，帰国後に殉教するなど，過酷でつらい運命をたどった[8]。

近代にはいると，キリスト教の感化を受けた青年世代のなかから，維新後の知的世界に指導的地位を占める者が数多く輩出したのとは対照的である。

19世紀中葉から今世紀にかけて西欧諸国による海外伝道が盛んに行われ，世界の各地に宣教師が送りだされた。わが国の開国は，西洋の，とくにプロテスタント陣営に興った新しい宣教熱の時期と重なっていた。

19世紀前半に何度かプロテスタント諸教派は日本へ宣教師を派遣しようとしたが，成功しなかった。1846年に英国人宣教師B．J．ベッテルハイムが短期間沖縄に滞在したことがあったが，宣教師が日本本土に入国を認められたのは，M．C．ペリーが来航して5年後の1858年に日米修好通商条約が締結されてからのことであった。1859年，米国監督教会，米国長老教会，米国改革派教会の宣教師（その多くは中国で宣教していた人々）が来日したが，鎖国時代（1641－1854）に培われた西洋文明への敵対感情が強く残っており，長崎と横浜のほかには滞在が許可されなかった。プロテスタントの最初の洗礼が行われたのは1865年になってからのことである。初期の困難な時代に，宣教師は辞書や文法書を作って伝道の準備をし，聖書を翻訳した。一方，新しい教育制度の制定に際して政府に協力し，また病院や私立学校を設立した[9]。

1873（明治6）年2月，明治政府はようやくキリシタン禁制の高札を撤廃する。外人宣教師による伝道事業が活発となり，カトリックは長崎地方を中心におもに農民層獲得に力を注ぎ，プロテスタントは都市の知識層の教化に努め，聖書の翻訳，医療事業，英語塾の経営などを通じて後継者を養成した。その英語塾は後にミッション・スクールに発展し，現在のキリスト教大学の基礎をつくった。明治10年代以降，これらの塾の出身者がおもに指導者となって活躍し，明治の思想界を大きく動かした。当時の宗教活動の代表的な人物には植村正久，内村鑑三，新島襄，海老名弾正らがいる。20年代にはいると国家主義の高揚によってキリスト教は圧迫されたが，その間に日曜学校等を通じで青少年のキリスト教教育がさかんに行われ，日清・日露戦争後は救世軍などによる救貧運動がさかんになった。片山潜・安部磯雄らによる社会主義運動が活発になったのもこのころである[10]。

幕末以降，わが国においては，「西洋の衝撃」を外在的な与件として教育変動が進行した。それはまた，日本教育の「世界」教育史への参加が実現した時期でもあった。この時期の教育史像の解明には，西欧教育思想・制度の積極的導入と継受，それらの日本的変容とその変容条件の所在といった事象の分析をさけてとおることは出来ない。その際，キリスト教の影響を無視しては正確な教育史像を結ぶことは困難である。

日米修好通商条約により日本宣教への道が開け，その後，外国人宣教師や日本人信徒たちは伝道や聖書の翻訳・出版の仕事，教会建設のほか，医療，監獄改良，禁酒運動，廃娼運動・娼婦救済活動などの活動を展開していったが，教育もその重要な一部であった。とくに，明治政府にとって政策的に充分に手をつけることが出来なかった教育の分野にキリスト教徒たちは進出し，成果を挙げていった。女子教育や幼児教育，障害児教育，感化教育

といわれた非行少年の矯正教育，孤児の救済事業と教育などがそれである。また，いわゆるミッション・スクールは，「ハイカラな」西洋文明に直接ふれる機会を日本人に与えた。キリスト教主義の学校は欧米文化の移植機関といった役割をはたした。そのほかにも，YMCA や YWCA のような青少年団体や成人団体をとおしてわが国の教育にこの宗教は深い影響を及ぼしてきた。

今後の研究に際して，日本の社会・政治や精神史との関連の下に考察するとともに，東アジア世界のなかで日本の歴史を考えるという視点も活かしていきたい。たとえば，ひとしく「儒教文化圏」と称されることがあるにもかかわらず，隣国の韓国はわが国よりもはるかにキリスト教信者が多い[11]。アジア近隣諸国，とくに中国・朝鮮との比較という視点が重要であろう。婦人宣教師が仕事をしたアジア諸国の中で，1870年代，80年代の日本ほど，彼女たちを歓迎した所はなかった。中国では20世紀初頭という遅い時点でも，宣教師に対する警戒心には強いものがあった[12]。日本のプロテスタント信徒は1872年の10人から1914年には10万3000人に増加した[13]。

ライシャワー教授（元駐日大使）が分析したように，中国と違って韓国では，キリスト教の宣教運動はかつては韓国人による抗日の，最近までは軍事独裁政権に対する抵抗の，いずれも味方であった。日本でも，キリスト教の宣教は中国でのような文化帝国主義的色彩を持たなかった。改宗したのは，政府の権威主義的な姿勢に反発して，自由な教育や社会的・政治的な自由を求める若き士族インテリが主体だった。日本のキリスト教が教育の分野だけでなく，社会運動や労働運動や小作人組合の運動まで関係し，社会党の創立に一役買ったのは決して偶然ではない。信者の数こそ総人口の1パーセントに達しないが，日本のキリスト教徒は教養人として社会から尊敬され，その数以上に社会を動かす力を発揮してきたのである[14]。

1978年の統計によると，カトリック教会5億6254万，東方正教会8499万，プロテスタント3億2066万，世界の宗教人口のうち23％がキリスト教徒の人口である。1979年末，日本のキリスト教系信徒数は，約97万人であるとされている。総人口に比べるとごく少数派であるが，知識階層が多く，強力な政治批判と抵抗の源泉，自由と平等性，民主主義，社会正義への関心，歴史に対する積極的な関与といった点において，わが国近代史において少なからぬ影響を及ぼした[15]。

平成天皇即位の礼に際してキリスト教団体が大嘗祭に反対する旨を発表，またフェリス女学院学長宅が右翼に発砲されるなど，天皇制との政治的緊張関係を，ときに，この宗教はひきおこしている。「結婚の儀」が行われた93年6月9日の朝，山形県小国町の私立基督教独立学園高校では，8時41分に朝礼がはじまり普段どおりの授業が行われた，と報じられた。校長は「みんなが自発的に祝うのならわかりますが，『学校はすべて休校に』と文部省が上から押し付けるのは，憲法上も問題だと思う」と話したという[16]。当日，西南学院大神学部（福岡市）でも自主的に授業が行われた[17]。

戦前の国家神道による国民統合と信仰の自由弾圧への反省と批判から，憲法における政教分離の原則にことさら敏感な反応を示す社会的勢力の一つがキリスト教関係者である。しかしその一方で，現在の皇后が聖心女子大学の卒業生であり，皇太子妃が田園調布雙葉学園出身であるように，キリスト教系諸学校は「名門」とみなされるところが少なくない。明治以降，政府はキリスト教に対して概して抑止的であったにもかかわらず，わが国社会にはそうした逆説性が存在する。

夏目漱石が明治末におこなった有名な講演のなかで述べたように，日本の文明開化には皮相うわすべりな空虚の感がつきまとっていたのかもしれない。日本のそうした近代化のなかでも，封建社会の身分制下になれていた国民に「個」の目覚めをもたらし，自我の確立と責任をうながし，あるいは内面性への自覚と沈潜といった精神性の深化において，キリスト教は近代日本の青年たち，とくに知識青年層の人間形成に少なからぬ影響をもたらした思想の一つといえるのではなかろうか。

先行研究については，1937年に刊行された平塚益徳『日本基督教主義教育文化史』が注目される。わが国におけるキリスト教主義教育の発展の跡を

キリスト教主義学校を中心として教育文化史的観点から考察した平塚の労作は，戦前の研究としては優れた水準のものである。ただ，惜しむらくは，対象が執筆時期に近づくに及ぶと学問的冷静さを失った筆致となっている。たとえば「即ちそれらの諸学校に於ける聖書教授，宗教的諸訓練其他は，我国国民精神の上に真に立脚し，かくして謂ひ得べくんば我国独自の基督教主義教育が行はれる為の努力が真に要求されているのである。しかしてこれらの要請は結局に於いて我国民精神との連関の下に基督教の本質，延いては福音主義教育の本質が蝉明せられることを根本条件とする」[18] といった箇所である。

ここには当時の政治状況を反映して，戦時体制に追随する姿勢がみうけられ，時代の体制イデオロギーへの被拘束性が否定できない。また，同書には教育福祉の分野で活躍した人々についてほとんど言及されていない，といった弱点もある。

戦後，キリスト教系諸学校の学校史のなかには，幾つか（たとえば『立教学院百年史』）優れてアカデミックな研究的論考が生まれていったが，この種のテーマに関して，平塚の仕事を質量ともに凌ぐ本格的にまとまった成果は出ていないように思われる。

日本研究ではないが，アメリカでは，キリスト教ミッションと中国の教育との関連についての研究蓄積があり，FENG, W. P. “Christian Higher Education in Changing China 1880-1950”（1976年）に代表される動向がある。同様に教育文化交流に関する歴史研究として位置づけることも出来ようが，わが国でも，アメリカ研究の立場，アメリカ社会史・女性史への関心から，婦人宣教師の存在と海外伝道に注目した研究が最近刊行された。小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師　来日の背景とその影響』（東京大学出版会，1992年）がそれである。そこでは，従来，学校史などで婦人宣教師を語るときに「敬虔なる信仰」ですべてを片づける傾向があまりに強すぎたことに対して，キリスト教をベースにした，より幅の広い社会・文化的文脈から説明しようとして，婦人宣教師の道徳観・女性観・教育観などに注目するアプローチがとられている。

さらに近年，『キリスト教人名辞典』（日本基督教団出版局，1986年）や『日本キリスト教歴史大事典』（教文館，1988年）が編纂され，また『世界キリスト教百科事典』（教文館，1986年），『聖書大事典』（新教出版社，1991年）が翻訳され日本語版が出されるなど，大部の事典があいついで刊行された。これらの事業は，関連分野における新たな学問的客観的な研究を促進するための条件を整備したものであるといえる。

日本の近代史のなかで，キリスト教は女子教育の分野での活躍をはじめ，いくつかの特色ある中・高等教育，幼稚園を生み，社会福祉事業との接点をもった貴重な教育の仕事を育んだ。在野に同志社を創った新島襄がいれば，初代文部大臣の森有礼のように，国の教育行政の頂点に立った人物にもキリスト教を信奉する者がいたのである。児童福祉方面には，「孤児の父」石井十次や感化事業のパイオニア留岡幸助がいる。また，たとえばクエーカー派の新渡戸稲造や無教会主義に立つ内村鑑三による知識青年層への浸透にも無視しえぬものがあった。彼らのなかには南原繁や前田多聞のように，戦後日本の民主改革のリーダーとなった者もいる。

次稿以降，時代をおって，キリスト教と教育をめぐる関係，キリスト教が近代日本の教育において果たした役割・機能を，学校史・教育文化史を中心に検討し，その担い手たちの思想と個性を含めた具体相を記述していきたい。

＜注＞

1）キリスト教徒の世界人口に対する比率は32.4%（1985年）。1900年に，全キリスト教徒の0.4%が東アジアにいたが，80年には1.3%となった。聖書は世界の1811言語に翻訳され（1980年），教派数2万800，8990民族グループ（言語数7010）に広がっている。『世界キリスト教百科事典』教文館　1986年　1-4頁

2）『世界キリスト教百科事典』629頁および年表

3）勝田守一・中内敏夫『日本の学校』岩波新書　1964年　7頁

4）同上　8-9頁

5）浜田陽太郎・石川松太郎・寺崎昌男『近代日本教育の記録　上』日本放送出版協会　昭和53年　77-78頁（明倫館の章；石川の発言）

6）『日本の学校』前掲　9頁

7）司馬遼太郎，ドナルド・キーン『世界のなかの日本十六世紀まで遡って見る』中央公論社　1992年　163-4頁

キリスト教の影響は，必ずしも本質的なものではなかったが，在華イエズス会士の天主教関係書を直訳，抄録した『本教外編』（未定稿）が著されており，その受容は決して皮相なものではなかった。『日本キリスト教歴史大事典』1174頁

8）遠藤周作「万華鏡」昔の留学生（三）朝日新聞　1992年7月26日

9）『世界キリスト教百科事典』628-9頁

10）『万有百科事典　GENRE JAPONICA　第3版』（日本歴史）1983年

11）『世界キリスト教百科事典』（教文館，1989年）の日本・韓国の項の表によれば，1980年における信徒の総人口比は韓国の30.5%にたいして日本は3.0%である。1970年代に約100派の教派があった。『ブリタニカ国際年鑑』（ＴＢＳブリタニカ，1990年）では，韓国のキリスト教徒は総人口の20.7%（265頁），そのうちカトリックは５%に達し，さらに増加しているとされる（391頁）。『朝日年鑑』（朝日新聞社1991年）では，同国のキリスト教信徒数は900万人とされ，『WORLD YEAR BOOK　世界年鑑』（共同通信社　1990年）は，プロテスタント649万人，カトリック187万人（1985年末）としている。（153頁）

12）小檜山ルイ『アメリカ婦人宣教師－来日の背景とその影響』東京大学出版会　1992年　267頁

13）世界キリスト教年表　67頁『世界キリスト教百科事典』所収

14）EDWIN O. REISHAUER “MY LIFE BETWEEN AND AMERICA”　1986年　徳岡孝夫訳『ラインシャワー自伝』文藝春秋社　1987年　41頁

15）『万有百科大事典　GENRE JAPONICA　第3版』（政治社会）1982年

近年，旧・現共産諸国内におけるキリスト教の「復活」が報じられた。キューバ共産党第4回大会は，1991年10月11日，党規約の改定を承認し，この中で従来の宗教信者に対する党員資格制限を撤廃した。聖書が公に販売されるなど宗教活動制限措置緩和の動きに沿って，「革命」を尊重する宗教者を党員とできることにした。（朝日新聞　1991年10月13日）

ロシア共和国内においてはロシア正教の復活の動向が伝えられた。同年末，同国最高会議幹部会は，革命記念日やメーデーは休日からはずし，ロシア正教のクリスマスの1月7日を休日とする労働法改正案をまとめた。（同紙　1991年12月25日）

朝鮮民主主義人民共和国でも，キリスト教の信仰が徐々に広がっている。北朝鮮は憲法で「反宗教宣伝の自由」とともに，「信仰の自由」を認めている。聖書出版の許可はまだ出ていないため，聖書不足の窮状にあるが，平壌には現在，カトリック教会が1つ，プロテクト教会が2つあり，信者総数は一万以上とみられている。（同紙　1992年5月29日）

16）朝日新聞　1993年6月10日

17）同紙　7月3日　「青野太潮・西南学院大教授に聞く」自主授業実施理由や決定までの経緯・反響などが語られている。

18）平塚益徳『日本基督教主義教育文化史』昭和12年『平塚益徳著作集　1』（教育開発研究所）所収　110頁